インバウンド訪問者のための日本文化関連の諸体験

朝　水　宗　彦
郭　　淑　娟
（山口大学東アジア研究科）

Abstract

Many of municipalities and companies in Japan often invite international students as virtual tourists to collect data. Experiences related to Japanese culture are attractive for these virtual inbound visitors. Japanese tea ceremonies, Japanese calligraphy, and Kimono wearing have been the typical examples. In addition, craft making such as pottery and lantern making were also attractive to the international monitors.

Keywords: monitor tour, international student, Japanese culture

１．はじめに

近年，日本におけるインバウンド観光客の増加は著しい。東京や京都，大阪のような大都市だけでなく，一部の地方においても外国人観光客が少なからず見られるようになった。そのため，現在では地方におけるインバウンド観光に関する研究もまた少なからず見られる。

一部の地方における外国人観光客の増加に伴い，今までインバウンド観光客が多くなかった地方においてもインバウンド振興策を講じるようになってきた。しかしながら，インバウンド観光客が少ない地方において，実際の観光客を対象としたアンケートやインタビュー調査は困難である。そのため，これから新たにインバウンド観光の導入を試みる地方においては，従来とは異なった調査方法が求められる。

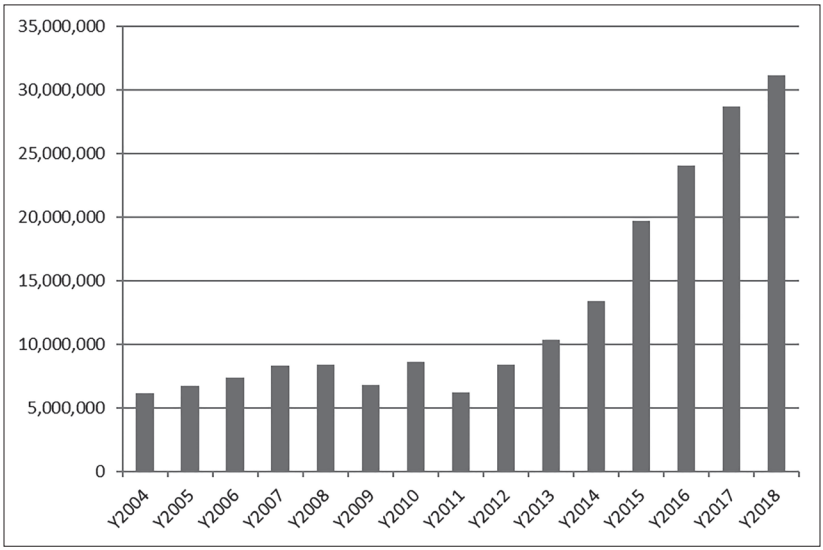
地方においてインバウンド観光をこれから試みようとするとき，留学生を用いたモニタリングが有効である。その際，外国人向けの日本文化体験プロ

グラムもまた多様化している。従来茶道や書道，着物の試着などが外国人向け体験プログラムの典型的な例であった。さらに，近年では，陶芸やちょうちん制作など，伝統工芸品づくりの体験も外国人向けに提供されつつある。

２．研究の背景

2020年の東京オリンピックが近いこともあり，日本の多くの地域においてインバウンド観光はすでに日常的な現象になっている。日本におけるインバウンド訪問者の数は，2011年の東日本大震災の時に一時減少したが，その後の増加は著しい。2003年にビジット・ジャパン・キャンペーンを実施したときのインバウンド訪問者数は500万人前後であったが，2018年には3000万人を超えている（図１）。

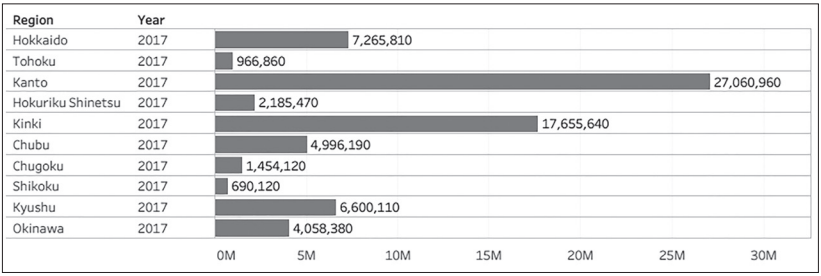
図１　来日訪問者数



出典：JNTO（2019）“Find Out About Traveling to Japan”, https://statistics.jnto.go.jp/en/graph/#graph--inbound--travelers--transition, Accessed October 30, 2019

インバウンド訪問者の滞在先は従来通り関東地方や近畿地方が多いが，北海道や九州，沖縄なども少なからぬ訪問者が滞在している（図２）。しかしながら，四国や東北のインバウンド宿泊客はまだまだ少なく，山口大学が立地する中国地方も2017年の時点では宿泊客はそれほど多くはない。ただし，これらのインバウンド宿泊客が少ない地域であっても，近年では様々な誘致策を試みている。山口県でも，2015年から元乃隅神社にインバウンド客の訪問が急増し，それに触発された周辺地域でもまた，外国人向けの新たな観光資源の発掘が試みられている。

図２　地域別外国人宿泊者数（2017年）



出典：JNTO（2019）“Find Out About Traveling to Japan”, https://statistics.jnto.go.jp/en/graph/#graph--inbound--travelers--transition, Accessed October 30, 2019

３．先行研究

地方におけるインバウンド観光の成功例として，北海道や九州，および今までの有力なインバウンド観光地の隣接地域が挙げられる。それぞれの研究事例として，例えば北海道は清水と祖田（2005），矢部と野続（2016），宮島（2019），九州は河村（2003），劉（2008），加藤（2010），亀山と侯（2016），ゴールデンルートから延長した観光地は金（2009），高原他（2018），青木と富山（2019）などが挙げられる。

上記のような地域では，すでにたくさんのインバウンド観光客がいるので，実際の観光客を対象としたインタビューやアンケート調査が可能であ

る。しかしながら，現時点でインバウンド観光客が少なく，将来に向けてインバウンド観光客を受け入れようとしている地域では，従来の調査方法が困難である。そのため，今後インバウンド観光客を受け入れようとしている地域では，独自の調査が行われている。たとえば，髙嶋（2007および2009）は，姉妹都市交流で訪問した外国人対象に聞き取り調査を行っている。山口（2008）はチャーター便による訪問者が来日した際にアンケート調査を行った。佐藤（2017）は今後新たにインバウンド観光客の増加が期待できそうな地域に訪問し，現地で聞き取り調査を行っている。

上記の調査はインバウンド観光客がまだいない地域でも将来のインバウンド化に向けた調査が出来るメリットがあるが，調査が出来る機会が不定期であることや，海外調査に必要な予算を確保する必要性など，弱点もある。そのため，留学生を活用した，より安価で簡単な調査法も見られる。山田（2017）は留学生を仮想観光客に見立てたモニター調査を行っている。朝水（2007）および朝水と郭（2019）も同様に，留学生を仮想観光客に見立てたモニター調査を行い，ツアー後に聞き取り調査を行っている。

ただし，従来のモニターツアーにも弱点がある。上記のようなモニター調査は地方自治体が準備したコースに留学生を参加させることが多い。しかし，これらのコースは日本人によく知られた観光地を留学生に訪問させることが多いので，日本人にとってあまり知られていなかった場所が，外国人観光客にとって急に人気が出る場合を想定していない。根岸（2017）は留学生とのワークショップと現地訪問によって新たなインバウンド観光地の発掘を試みている。同様に，朝水（2019）もコースを確定する前に留学生と会合を開き，その後にモニター調査とツアー後のアンケート調査を行っている。

４．研究方法

なお，一般論として，アンケート調査は普遍的な結果を導き出すのには有効であるが，あらかじめ用意された設問以外のデータを集めることは困難である。他方，インタビュー調査では個々のケースを掘り下げることは可能で

あるが，普遍性に欠ける。これらの欠点を相互に補うため，半構造化インタビューを行うこともあるが，調査者と調査対象者双方にある程度のスキルが必要である。

そこで，本研究では，マイノリティ教育などで行われているヒューマンライブラリーの手法に着目した。本来のヒューマンライブラリーは口述で行われ，様々な出自の話者の一人一人が「本」として各自のストーリーを語るものである[1)]。しかしながら，山口大学のモニターツアーに参加した留学生は中国の出身者が多く，書き言葉の能力が優れている。そのため，山口大学の場合，口述よりも文章を書かせることによって留学生の日本文化体験について分析するほうが効果的である。

本研究では，一般的なアンケート調査よりも深く考察するため，今までモニターツアーや日本文化体験プログラム等に参加してきた留学生に短いエッセイを提出してもらい，その内容を個別および総合的に分析した。研究協力者は来日後比較的日が浅い姚氏（貴州省出身，女性），来日後３年経ち日本の暮らしに慣れている周氏（山東省出身，女性），博士号修得後に研究員として日本に残って今では日本語能力がかなり高い郭氏（台湾出身，女性）の３人である[2)]。

５．はじめてのモニターツアー

まず，３人の中で，来日経験が一番浅い姚氏のエッセイから見ていく。姚氏は元々は日本のアニメを通して日本文化に接した。「名探偵コナン」や「ナルト」などのアニメを通じて，抹茶，神社，花火大会，初詣などの日本文化

１）デンマークが発祥地であるヒューマンライブラリーは，元々は障がい者やホームレス，セクシャル・マイノリティなどに対する理解を進めるために用いられたが，日本では留学生や外国人労働者の理解のために応用されることが多い。ヒューマンライブラリーについては以下のサイトを参照されたい。日本ヒューマンライブラリー学会「本学会について」http://www.humanlibrary.jp/about/, 2019年11月１日閲覧。

２）郭淑娟氏は東アジア研究科（博士課程）修了後，同研究科のコラボ研究員（博士研究員）として引き続き研究を続けている。周暁飛氏（ZHOU Xiaofei）と姚博怡氏（YAO Boyi）は東アジア研究科の大学院生である。

を知った。姚氏が体験したモニターツアーは以下のようなものである。

去年（2019年）の９月に，筆者は留学生として中国から日本へ来た。モニターツアーと日帰り旅行で自ら日本文化と接触することができた。2019年11月10日に，山口・防府地区観光振興関係機関連絡協議会が主催したモニターツアーに参加し，歴史の道“萩往還と山陽道”の日帰り旅行をした。このモニターツアーで，萩往還の歴史，抹茶文化などを体験した。萩往還では，細くて険しい道でウォーキングをしたり，ガイドの話を聞いたりして，長州ファイブについての歴史などを知った。

続いて，防府市の防府天満宮へ行った。そこで一番印象深いのは抹茶体験であった。茶室では，抹茶の作り方を紹介してくれた。また，お茶を飲む前にお菓子を提供し，日本では抹茶を飲む前にお菓子を食べるという習慣があると説明してくれた。抹茶はちょっと苦い味をして，甘いお菓子とはぴったりであった。しかし，抹茶体験では一つ慣れないところがあって，それは正座であった。たった5分の正座で耐えられなくなった。みんなは正座のままでちゃんと座っていたのに，筆者はとうとう正座をやめた。

姚博怡

先述のように，姚氏は来日前からアニメを通して，日本文化を知識として知っていたが，実際の抹茶体験は防府天満宮が初めてであった。姚氏にとって，日本文化の実体験はまだまだ目新しい。ある程度日本の暮らしに慣れてくると畳の生活に適応してくるが，姚氏にとって当時は正座が苦痛で，このエッセイを提出した2020年１月の時点でも，インパクトが強く残っている。

なお，姚氏は上記のモニターツアーの後，同じく防府天満宮へ再度訪問している。紅葉の11月とは異なり，初詣の時期だったので，同じ防府天満宮であっても雰囲気が異なり，それぞれ違った体験を楽しめる。季節によって異

なった体験ができることはリピーターを得るうえで大きな強みである。

2020年の初めに，日本の新年参拝という文化を体験するために，防府市の防府天満宮に初詣へ行った。商店街から天満宮へ向かった道では，人がいっぱいで，車も多くて渋滞にもなった。日本人が初詣に対して重視していることに気づいた。天満宮に到着すると，人々は参拝のために行列に並んでいたことに驚いた。もともと山口では，あまり多くの人が住んでいないので，こんなに多くの人が集まったのは初めて見た。これは新年参拝という伝統行事を尊敬しているからである。行列の途中には，いろいろな食べ物が売られ，にぎやかだった。先輩の紹介によると，大晦日の夜に，多くの人が天満宮に集まって，零時を待つ習慣もあるそうだ。参拝した後は，お守りとかおみくじとかを買って，新しい年によい運を祈る。筆者は日本に来てまだ半年にもならないから，まだいろいろな日本文化に接触していないので，留学の間になるべく多くの日本文化を体験したいと思う。

姚博怡

６．複数参加のモニターツアー

次に，来日後の年数がある程度長い周氏のエッセイを見ていく。山口大学の学生を対象としたモニターツアーは年に何度か行われているが，周氏はそのうちの２回を体験した。周氏は茶道など，典型的な日本文化はすでに経験済みであり，普遍的な日本文化と各地の郷土文化の違いを十分認識している。

山口に来たばかりの留学生にとって，モニターツアーは非常に助かります。送迎バスに乗って，案内してくれる方もいらっしゃって，自分は何も考えずにゆっくりと旅を楽しめるからです。ラッキーなことに，大学はモニターツアーのチャンスを学生，特に留学生に提供してくれます。

私もモニターツアーに2回参加しました。

1回目は2年前（2018年）の秋の，萩往還と山陽道のモニターツアーで，江戸時代に整備された道が昔の萩と防府をつなげていた重要な街道であったことがわかりました。道の多くは山の中にあって，狭くて歩きにくいですが，昔は藩主の参勤交代の「お成り道」としてよく利用される道でした。空に向かってそびえている竹や杉などの巨木が風にささやいていた物語を聞くと，一瞬時代を忘れて，タイムスリップした感じがしました。

次に，今の便利な時代っていいなと思いながら，昔の諸国の働き者たちの知恵を感服しています。当日のツアーのコースの一環として，富海の清水家住宅で藍染め工房を見学しました。パンフレットによれば，富海は休耕田を利用して，藍の栽培を行っています。毎年3月に畑を耕して，藍の種をまいて，藍染めに欠かせない「すくも」ができるまで，10か月以上かかります。さらに，「すくも」を使って，伝統的な技法で作った藍染製品は天然の美しさがあるため，人々に愛用されているようです。中国の貴州省にも「藍染」と呼ばれる布を染める方法があって，千年以上の歴史があるそうです。ただし，両国の美意識が違っていますので，藍染製品も独自の特色を持っているのです。

さて，萩往還に戻りますが，実はコースの中で一番面白かったのは防府での茶道体験でした。なぜかというと，日本の伝統的な茶道文化を体験したからです。防府天満宮は学業を守ってくださる神宮としてよく知られています。神宮以外，日本文化を体験する施設が何か所も見られます。拝殿につなぐ石の階段の途中には，「芳松庵」という茶室があります。当日，そこでふつうの茶碗よりずっと巨大などんぶりで，30人ぐらいで抹茶を飲みまわしました。抹茶は何度も飲んだことがありますが，

こんな珍しいやり方で飲むのは初めてです。力を入れて自分の顔よりも大きな茶碗を持ち上げてお茶を飲んでいるシーンを写真に写して，それを見るたびにその時の気持ちが浮かんできます。

また，山口市の菜香亭も日本の庭，日常用品，芸術品など伝統文化が体験できる場所として，非常に行くべきところだと思います。短い日帰り旅行でしたが，伝統文化と歴史を満喫して，とても有意義な旅でした。

周暁飛

周氏が初めに体験したモニターツアーは毎年開催されているもので，姚氏が参加したツアーの１年前に開催されたものである。例年同じようなコースをたどっているが，逆に言えば違った年との比較も可能である。もちろん毎年参加者が代わっているので個人差はあるが，大掛かりな抹茶体験は例年印象が強いようである。

なお，周氏は在学して日が長いので，別のモニターツアーにも参加している。１回目のツアーと同じように歴史と伝統文化のツアーであるが，訪問先と体験内容は異なっている。１回目のツアーはあらかじめ決められたコースを示して参加者を募集したが，２回目のツアーでは，事前に留学生の希望を聞き，希望の多かった場所のいくつかをツアーに組み込んでいる。実際に訪問してみると，周氏の場合，萩焼の製作体験が印象に強く残ったようである。

２回目は2019年の１月でした。前回と同じ伝統文化と歴史をテーマとするコースですが，内容は全然違っています。前回は萩に続く道を歩きましたが，今度は萩の本場へ向かうコースになりました。午前は松下村塾を見物してから，全国でも有名な萩焼制作を体験しました。午後は萩の博物館とその周辺にある重要伝統的建造物群保存地区を見学しました。

山口に来てから，萩が史跡の豊かな町であることなど，いろいろな情報を手に入れました。例えば，江戸時代の地図を使っても今の城下町の構成がわかるとされています。また，萩には国選定の重要伝統的建造物群保存地区がありますので，研究価値が高いです。さらに，萩は維新志士の誕生地でもあれば，人材が輩出したところでもあります。実際に現地に来たら，思ったとおりの歴史の雰囲気が漂っている町でした。静かで整った町の中を歩いていて，時間の流れも感じさせられました。

その中で，私が一番興味を持っているのは萩焼です。萩焼は400年以上の歴史を持って，日本ではよく知られている陶芸文化です。柔らかい素地を持っていて，硬い製品になるのはとても不思議です。職人さんの作り方を見ただけでは簡単なことだと思ったのに，自分の手で作ったらコップもコップらしくなくなりました。それでも，私に属している唯一無二のコップでしたので，飾り物として大切にするようになります。その日は雨が降っていましたし，風も強かったのですが，ちっとも興ざめていなくて，逆に普通の旅と違った趣を加えていました。

周暁飛

７．日本体験の奥深さ

最後に，郭氏のエッセイであるが，郭氏は山口以外にも，広島や熊本，島根，大分，岡山，鎌倉，東京など，各地で日本文化を体験している。さらに，日本での滞在歴が長いこともあり，茶道も抹茶だけでなく，あまり知名度が高くない煎茶道も体験している。

私は煎茶道を体験した。煎茶道にはいくつかの特徴がある。外国人が知っている茶道は主に抹茶を用いる。煎茶道は外国人だけでなく，日本人の間でもあまり知られていない。しかし，煎茶道は参加してみるといろいろな魅力がある。

私が体験した煎茶道の実際の事例であるが，まずはカルチャースクールのものがある。ここでは長期的に参加して面白さへの理解が深まった。ただ，困難もあって，特に長い時間畳の上で正座するのは大変だった。正座は他の外国人にとっても大変だったらしく，島根のある民間の煎茶道体験では，正座が苦手な外国人に足元を隠す風呂敷を配るなど，細やかな心配りがされたそうだ。

インバウンドのコト消費の成立条件として，①旅行先に関する理解の共有，②参加した後で想定外の困難に遭わないこと，③上手にできなくても許容される雰囲気，④もっと探求したいと思う深さがあることの4点が考えられる。

郭淑娟

世界的には歌舞伎，中国地方では神楽を見学できる機会が多いが，能は郭氏が大学院修了後に初めて鑑賞した。郭氏は現代の日本語についてはかなり使えるが，古典芸能で用いられている日本語は日本人でも難しい。日本通の郭氏でも苦労したようであり，多言語化など，インバウンド化に向けてさらなる対応が求められる。

私は，2017年６月に歌舞伎[3]と2019年１月に能[4]の公演を見る「コト消費[5]」を体験した。歌舞伎は，東銀座の歌舞伎座で鑑賞した。役者さんの目立つ化粧が印象に残った。女性を演じる役者さんの身振り手振りがとても女性らしくて驚いた。舞台はぐるっと回るようになっていて，舞

３）歌舞伎の演目は，鎌倉三代記，曽我綉侠御所染，一本刀土俵入であった。
４）能の演目は，翁，末広がり，巴，野守であった。
５）モノを所有することに価値に見出し，欲しいモノを買うことが目的の消費を「モノ消費」，商品やサービスを購入したことで得られる体験に価値を見出し，何かをすることが目的の消費を「コト消費」と定義する（国土交通省2018『観光白書平成30年版』http://www.mlit.go.jp/statistics/file000008.html, 2019年8月13日アクセス）。

台の場面があっという間に変わり，華やかな衣装がとても美しかった。数年前の当時は，イヤホンガイドの多言語化が進んでおらず，日本語と英語のイヤホンガイドしかなかった。私は，事前にパンフレットを入手して，公演の演目のあらすじや歴史を予習していたので，ストーリーが少しわかった。ただ，最近の国立劇場では多言語ポータブル字幕機が韓国語や中国語を含むいくつかの外国語に対応している。

能は，国立能楽堂で鑑賞した。私が見た公演では，座席に設置してある字幕スクリーンが使われていなかった。役者さんはお面をつけている人もいて，表情はあまり変化がない感じがしたが，鼓，笛，太鼓の音楽と役者の足踏みの音が響いて，とても迫力があった。衣装は歌舞伎よりも控えめで洗練されていて，最小限の動きで気持ちなど，いろいろなことを表現していた。能と能の演目の間に狂言があった。能と合わせて事前に演目のストーリーのあらすじを予習していたので，見所や笑うポイントは分かったが，聞こえてくる日本語は難しかった。

歌舞伎と能の「コト消費」を体験して，関連する情報の多言語化がまだ不十分であると感じた。ウェブサイトは，英語版があるものの，その他の言語に対応したイヤホンガイドの案内が日本語と英語でしか読めないなど，まだまだ発展の余地が残されていると思う。歌舞伎と能は，外国人にとっても，とても魅力的な芸能である。これから，歌舞伎や能が，インバウンドの「コト消費」のコンテンツとして発展するためには，関連情報がもっと多様な言語でより詳しく紹介されるようになるとよいと思う。歌舞伎では，多様な外国人向けの鑑賞教室もあり，おもてなしの発展の兆しが見えるので，日本の芸能分野の「コト消費」のサービスのさらなる進化に期待したい。

郭淑娟

８．考察

まず，３人に共通していることであるが，抹茶体験の印象が強かった。姚氏の場合はいきなり大規模な茶会に参加したので，もしかすると茶道に対して誤解があったかもしれないが，周氏のように何回か茶会に参加すると一般的な茶会と特殊な茶会の違いが分かってくる。さらに，郭氏のように経験を積むと，抹茶以外にも茶道があることや，インバウンド向けの対策など，より多面的な視点から茶道を考察している。今回はサンプルが３件だけなので確証はできないが，茶道は初心者にとっても印象深いものであり，さらにリピーターにとっても新たな発見がある息の長いコンテンツである。

次に，日本での滞在が長い周氏と郭氏に共通することであるが，入門的な日本文化体験ではなく，より本格的な文化体験を試みている。そのため，リピーター獲得のためには，初心者向けのプログラムだけでなく，段階的に難易度を高めていったいくつかのプログラムを用意することが望ましい。

さらに，姚氏に見られるように，来日前の日本文化の知識が，日本文化体験の楽しみにつながる可能性がある。姚氏のように，来日前にアニメや漫画ですでに知っていた茶道や神社，初詣など，あらかじめ知っていたことを，来日してから実際に体験することは，初来日の外国人観光客にとっても応用できそうである。来日後の初心者向けプログラムだけでなく，来日前に日本文化を知ってもらうこともプロモーションのため重要であろう。

ただし，本研究には限界がある。本研究の対象者のうち，姚氏は３人の中では日本文化体験の初心者ではあるが，日本語能力試験１級を有する博士課程の学生である。実際の外国人観光客は日本語が分からない者もたくさんいるため，初心者向けの日本文化体験プログラムの開発のためには，より日本語能力が限定されている英語基準の学位コースの留学生[6]や交換留学生など，より多様な留学生でモニタリングする必要性がある。

６）例えば山口大学の場合，大学院の東アジア研究科や経済学研究科には英語で受験し，英語で授業を受け，英語で学位論文を書くコースが通常の日本語コースと併設されている。さらに，立命館アジア太平洋大学（APU）や国際教養大学（AIU）のように，地方であっても規模の大きな英語学位コースを有する大学が日本各地に増えている。

９．おわりに

近年の日本におけるインバウンド観光客数の増加は著しく，首都圏や近畿だけでなく，北海道や九州，沖縄などでも多くの外国人観光客が宿泊している。山口の場合，インバウンドの宿泊者はそれほど多くないが，元乃隅神社など，インバウンド観光客の人気の高い観光資源を有する。地方におけるインバウンド観光の成功例に触発され，その近隣地域でもインバウンド化が試みられるようになってきた。その時に有効な調査方法は本研究で用いたような，留学生を仮想インバウンド観光客と見立てたモニタリングである。

しかしながら，元乃隅神社のように，日本人にとってあまり有名でなかった場所が急に外国人に注目されるようになることもある。留学生を用いたモニター調査を行う場合，日本人にとってよく知られた訪問地だけを選択するのではなく，できればコース設定の際に，留学生に参加してもらうことが望ましい。

なお，本研究では，典型的なモニタリング調査で用いられているアンケートではなく，体験後のエッセイを用いて分析した。モニターツアー後に個人で再度訪問した事例や複数のモニターツアーを比較した事例，よりディープな日本文化の体験など，アンケートでは導きにくい内容を掘り下げることができたと思われる。しかし，本研究はエッセイの協力者が３人で，なおかつ出身地が偏っているので，今後も同様の調査を継続し，より普遍的な考察を行いたい。

参考文献

青木成史，富山栄子，2019,「インバウンド推進時代の新潟県の稼ぐ観光地域づくり：人材育成の在り方に関する考察」,『事業創造大学院大学紀要』10(1)，35-51頁

朝水宗彦，2007,『外国人観光客受け入れのための大分県内留学生等による観光地調査』大学コンソーシアムおおいた

朝水宗彦，2019,『留学生を活用したインバウンド資源の発掘』萩市大学連携地域づくり推

進事業

朝水宗彦，郭淑娟，2019,「地方におけるインバウンド観光の成長とコト消費の可能性」『日本国際観光学会全国大会梗概集』23，16-17頁

亀山嘉大，侯鵬娜，2016,「インバウンドの拡大と地方公共団体の情報発信―中四国・九州地域の事例から―」,『経済地理学年報』62(3)，191-209頁

加藤英一，2010,「対馬における「国境観光」の現状と課題：日本全体及び対馬への韓国人旅行者の特性の違いにより明らかにされた国境の島特有の観光振興上の課題と対応の方向性に関する考察」,『東海大学紀要. 観光学部』１，45-64頁

河村誠治，2003,「わが国インバウンド･ツーリズムと地方の課題」,『長崎国際大学論叢』３，11-21頁

金玉実，2009,「地方におけるインバウンド観光の進展：長野県を事例に」,『地域研究年報』31，77 -86頁

宮島良明，2019,「インバウンドブームと北海道観光：訪日外国人観光客急増の背景と今後の課題」,『開発論集』103，77-95頁

根岸洋，2017,「文化遺産観光研究プロジェクト」,『国際教養大学　アジア地域研究連携機構研究紀要』５，47-64頁

劉明，2008,「九州ディスティネーションにおけるマーケティング戦略」，朝水宗彦編『アジア太平洋の人的移動』オフィスSAKUTA，136-185頁

佐藤朋紀，2017,「タイから秋田県への観光誘客の可能性」,『国際教養大学　アジア地域研究連携機構研究紀要』５，15-29頁

清水伊織，祖田亮次，2005,「北海道におけるアジアからのインバウンド･ツーリズム」,『北海道地理』80，25-39頁

高原尚志，高辻春菜，井上春菜，2018,「インバウンドを取り込むための観光に関する一考察：金沢を例として」,『人間生活学研究』９，81-87頁

髙嶋正晴，2007,「山口県の2006年度国際インバウンド観光政策について：姉妹都市・友好都市交流を活用したモニターツアーとグッドウィル・ガイド研修会を中心に」,『産業文化研究所所報』17(3)，3-14頁

髙嶋正晴，2009,「山口県の国際インバウンド観光振興の取り組みと展望：東アジア地域交

流連携と着地型観光交流地域づくりと取り組み」,『地域共創センター年報』１，183-209頁

矢部拓也，野続祐貴，2016「北海道におけるインバウンドを活かした健全な地域形成とはなにか？」,『徳島大学社会科学研究』30，175-199頁

山口泰史，2008,「庄内地域における外国人旅行者の満足度について-庄内空港チャーター便ツアー客を対象に-」,『季刊地理学』60，109-113頁

山田浩久，2017,「地方観光地のインバウンド観光に大学の能動的関与が果たす役割― 山形県上山市を事例にして ―」,『季刊地理学』69(1)，50-65頁